

目次

はじめに

1

第1章 「ゲイビーブーム」と世論の変化……………7

プロローグ——チャーリー一家の成り立ち／ゲイビーブームに沸く米国／同性婚容認判決と原告たち／ゲイライツ運動と保守派の逆襲／諸外国の動向と世論の変化／親子関係の確立——レズビアンカップルたちが認めさせた「二次親養子縁組」／生殖ビジネスの先進地／代理出産の光と闇

第2章 ゲイカップルと子どもたち——代理出産という選択……………41

妻子にカミングアウト／ためらいと反対を乗り越えて／多胎妊娠と障害のリスク／費用は一〇〇〇万円前後——限られた人種と階層／禁止州から容認州へ渡航／「私は名誉叔母」——ある代理母の告白／妹が卵子を提供——生物学上の母からの手紙

第3章 レズビアンカップルと子どもたち………73

——人工授精、体外受精という選択

半匿名——一八歳になったら「父」に連絡可能／彼女の卵子、私の子宮／生物学上の父を知りたい／親は六人——レズビアンカップルとゲイカップルの共同育児／親権を「もう一人の母」に譲ったドナー父／親権、養育費………トラブルを避けるには

第4章 里親制度、養子縁組で子どもを迎える………97

——非血縁という選択

ゲイカップルを親に選んだ少年／シングルを装って国際養子縁組／障壁を乗り越え、国内で養子を迎える／「私にママはいるの？」——四歳で真実告知／「オープン・アドプション」——生みの母と毎年面会

第5章 子育てが直面する現実——役割分担と差別………119

異性カップルより平等？ 役割分担／真実告知——出生の真実、

どう教える？／同性同士で異性の子どもを育てる／差別といじめ
——四割が学校で「嫌がらせ」／親との断絶を乗り越えて／「離婚」がもたらすもの

第6章

日本で同性親になるということ……

——ハードルと課題

増える同性同士の「結婚式」／渋谷区同性パートナーシップ条例
の意義／子どもをもつことの障壁／「私たち、妊娠中です」／ハ
ドルを越えて——レズビアンマザーたちの悩み

145

第7章

「家族のかたち革命」のゆくえ……

子どもに父と母は必要か——立ち上がる「ゲイビー」たち／だれ
が生殖補助医療を利用できるとするべきか／家族とは何か——核
家族から「相互浸透的家族」へ

159

おわりに

171

はじめに

どうして、同性カップルの子育てというテーマに関心を持ったんですか。取材で会った米国の同性カップルたちの多くに、こう尋ねられた。

日本でも最近、性的マイノリティー(LGBT)の権利保障が注目されてきている。二〇一五年四月には渋谷区で同性パートナーシップ証明書を発行する条例が施行され、同性婚の法制化を求める動きも始まった。だが、子どもを持つ同性カップルとなると、まだほとんど見当たらない。当事者でもない日本の新聞記者がなぜこのテーマを、と思うのは当然かもしれない。

レズビアン(女性同性愛者)、ゲイ(男性同性愛者)、バイセクシャル(両性愛者)、トランスジェンダー(性同一性障害を含む、心と体の性別が一致しない人)の頭文字を取ったLGBT。こうした性的少数者について、私はこれまで特に知識があるわけではなかった。身近にカミングアウトしている人はいなかったし、同性愛者で思い浮かぶのはテレビに出てくるオネエ系タレントくらい。正直、「一部の特殊な人たち」という偏見すらあったように思う。

苦い経験がある。

東京社会部の駆け出し記者だった二〇〇〇年頃、上野公園におもしろいホームレスの男性同性愛者がいると聞き、青テントを訪ねて、日本酒を飲みながら話を聞いた。日焼けした顔には深い皺が刻まれ、白髪交じりの髪が背中まで無造作に伸びている。六〇代後半の実年齢よりだいぶ上に見えた。男性は週末になると、上質そうな白い着物をはおり、公園の広場へ。持参したラジカセから流れる演歌に合わせて日本舞踊を舞う。居合わせた見物客から、少額のチップをもらえることもあった。着物は母の形見で、これだけはどんなに空腹になっても手放せない、と言う。

だが、何度も上野に通いながら、結局私は、それを記事にしなかった。書き始めてみたものの、どうしても色物のような気がしてしまい、新聞記事としてうまく料理することができなかったのだ。読者の共感を得るのが難しいのではないか、原稿を出してもボツにされるかもしれない、などと自分に言い訳をしたが、そう思うのは私の中に偏見があったからだろう。

「日本で同性愛者として生きていくのは、すごく大変なことなのよ」。男性のそんな言葉を思い出すたびに、胸がうずく。

あれから十数年。

二〇一三年夏、私は五歳だった長男を連れて渡米した。二人目の子どもの産前休暇に入り、前年から米国・ニューヨークに赴任していた夫と合流するためだ。

マンハッタン中心部の喧騒から少し離れた家族連れが多く住む地域に引っ越しをして間もなくのこと。近くの公園へピクニックに行った時、「あれっ」と思った。隣にシートを敷いていた男性二人組

が、双子らしき女の子の赤ちゃんをあやしていたからだ。二人でそれぞれオムツを替えたり、寝転がって赤ちゃんを胸の上に乗せてほおずりしたり。男性の一人がもう一人の男性の手を握った時、鈍い私はいよいよ気が付いた。二人はゲイカップルだったのだ。

当時、米国ではニューヨーク州をはじめ、同性婚を認める州が急増していた。日本と違って、都市部では街中で手をつないで歩いている同性カップルを見かけることは珍しくない。だが、同性カップルが家族をつくっているとはまでは、考えたことはなかった。

その後、さらに驚くべきことが起きた。

九月に入って、長男が市立小学校のキンダーガーデン(日本の幼稚園年長に入学した。三週間ほどたったある日、長男の教室の掃除をするボランティアに行くと、同じクラスのチャーリーという男の子の父親も来ていた。机を拭き、床のモップ掛けをしながら、お互いに自己紹介をしていた時のことだ。「うちは、夫がこっちで新しい仕事を見つけたから、学校が始まる一週間前にボストンから引越してきたんだ」。チャーリーの父親が、さらりと言った。

え、ハズバンド(夫)?

ということとは……。

そういうえば、少し前の週末に、近所でチャーリーと父親が、もう一組の父子らしき男性と男の子と一緒に散歩している姿を見かけたことがあった。ピクニックでの一件があっただけに一瞬頭をよぎったが、すぐにその考えを打ち消していた。だがやはり、男性二人は同性カップルで、あの四人は家族だったのだ。

こんな身近なところにも同性親家庭がいたなんて。

気になって調べてみると、現実には私の常識のはるか先をいつていた。この一〇年間で米国で子どもを育てる同性カップルは倍増し、一〇万組以上にのぼるといふ。レズビアンカップルの三組に一組、ゲイカップルの五分の一が親になっているという統計もあり、チャーリー一家のような同性親家庭は、米国の都市部を中心にすでに日常の風景となりつつあるらしい。

米国は子どもの養子縁組が浸透している上、生殖ビジネスの先進地でもあり、他国のような規制がほとんどない。そうしたこともあり、里親、養親として子どもを迎えるほか、精子提供や卵子提供、代理出産といった生殖補助医療をへて子どもをもうける同性カップルが、日々増え続けているのだ。こうした現象を指して、ベビーブームをもじった「ゲイビーブーム (gayby boom)」という造語がメディアで使われるまでになっている。

もともと米国という国は、多様な家族のかたちを認める寛容さがある。筆者が小学生だった一九八〇年代にも、父の転勤で何年かニューヨークに住んでいたのだが、当時一番仲よくしていたのは、米国人夫婦に養子として迎えられたイスラエル生まれの女の子だった。彼女には夫婦の実子である姉もいたが、「私は養子なの」とあっけらかんと話していた。ほかにも韓国とベトナムから養子縁組で迎えられた友達もいて、仲良し六人組のうち三人が養子という時もあったほどだ。

それでも同性愛者に対しては、揶揄するような社会的風潮がまだあった。通っていた体操教室の女性コーチが、他の男性コーチについて、「あの人、絶対ゲイよ」とひそひそ声で話していたことを思

い出す。気に入らないことがあると、「That's so gay(それ、最悪だね)」と口癖のように言っていた同級生もいる。若者の間で流行っていた表現で、同性愛者を指すゲイという言葉が、「最低」や「最悪」といったネガティブな意味で使われていた。この表現は今でも生徒の間で使われており、同性愛者の権利擁護団体がしばしば問題視している。

あの時代、同性愛者ははるかに生きにくかっただろうし、少なくとも、オープンに子育てをする同性カップルは周りにはいなかった。それが三〇年ほどして、ゲイカップルに育てられている子が息子の同級生になるとは、隔世の感というか、時代は変わるものだなと思う。

実際、オバマ大統領は就任直後から公民権に関する重点政策として、LGBTの人権擁護に力を注いできた。二〇一二年五月には現職の大統領として初めて同性婚を支持する考えを表明し、翌年一月の第二期就任演説では、女性運動、公民権運動と並んでゲイライツ運動の歴史に触れ、「我々の旅はまだ終わらない。同性愛者たちが法の下で他の人たちと同じように扱われるまでは」と、踏み込んだ。二〇一五年六月、米連邦最高裁が同性婚を憲法上の権利として認める判決を下し、州によって判断が分かれていた同性婚が、全米五〇州で合法化されることになったのは記憶に新しい。米国において同性愛者の権利は今や、人権問題のど真ん中の話なのである。

何の偶然か、長男とチャリーはその後親友になり、お互いの家をよく行き来するようになった。子どもを通じて一家と付き合ううちに垣間見た「新しい家族のかたち」には、多くの発見があった。

同性カップルの場合、子どもは両親のどちらか一方としか、もしくはどちらとも血のつながりはな

い。以前から、生みの親と暮らせない子どもを育てる里親家庭や養親家庭の取材を続けてきた私は、同じ空気を吸い、一緒に笑って、泣いて、ともに過ごした時間の積み重ねこそが家族だ、と納得できるような事例をいくつも見てきた。と同時に、成長して、生みの親がどんな人か知りたいと願う養子たちの声も聞いた。

英語に「乗り越えるべき試練」という意味の「チャレンジ」という言葉があるが、同性カップルには、この血縁というチャレンジに加えて、両親が父と母という一組の男女ではなく、父二人、もしくは母二人であるという二重のチャレンジが存在する。いわゆる「伝統的な家族」に対して、これ以上の挑戦があるだろうか。

「結婚とは男と女のものだ」。「子どもには父親と母親が必要だ」。米国の保守派たちは声高に叫び、同性親家庭に反対する。

だが、この世に生を受けた時から、二人の父、二人の母しか知らないという子どもたちが、現に存在している。目の前で長男と一緒に遊ぶチャーリーが、まさにそうだ。彼ら一家の姿に背中を押されるように、私は実験国家・米国で進行中の「家族のかたち革命」の一端を知りたくて、取材を始めた。その結果生まれたのが本書である。

第1章

「ゲイビブーム」と世論の変化



同性婚容認判決の2日後にニューヨークであったプライド・パレードでは、2万人以上が行進した。子連れで参加する人も目立った。

プロローグ——チャーリー一家の成り立ち

二〇一四年春、長男がニューヨーク市立小学校に入学して半年ほどたった頃のことだ。遊びに行つたチャーリーの家から帰宅すると、長男は開口一番、こう言つた。

「クリスとボブ、結婚してゐるんだつて。男と男つて、結婚できるの?」

チャーリーは、長男と同じクラスの、ゲイカップルに育てられている男の子である。真ん丸の大きな青い瞳に、真つ赤な唇。まっすぐなブロンドヘアを肩まで伸ばしている。レゴブロックと忍者ごっこ、そしてポケモンを愛する、少し人見知りで控えめな性格の美少年だ。両親は、四四歳のクリスと五四歳のボブ。二〇〇三年に米国で初めて同性婚を容認した「先進地」マサチューセッツ州から引越してきたばかりで、同じ学年にいる兄弟のオーウェンと四人で暮らす。うちの長男によると、自宅の居間には父親たちの結婚式の写真が飾られており、兄弟は二人を「ダディ・クリス」、「ダディ・ボブ」と呼び分けているという。

「男の人同士が結婚できる国もあるよ。アメリカの一部の州とか、オランダとか。日本ではまだできないけどね」。私が答えると、長男は続けた。

「でも、お父さんが二人で、チャーリーはどうやって生まれたの?」。答に窮していると、考え込んでいた長男の目が光つた。

「わかつた! お母さんが産んだ後、いなくなつちやつたんじゃない?」

「父親が二人」という家庭を初めて見た息子は、六歳児なりに状況を理解しようとしていた。「そうだね、お母さんが育てられない事情があったのかもしれないね」と答えたものの、私はこの時、チャリー一家がどうやって家族になったのか、まだ知らなかった。

二〇一三年秋に一家と出会った当初、ボブは著名ファッションブランドの管理職をしていて、クリスは専業主夫だと聞いていた。米国の多くの小学校では、低学年のうちは保護者らが子どもの送迎をする。授業が終わる午後二時五〇分、学校に息子たちを迎えに来ていたクリスと、よく顔を合わせた。クリスはがっしりとした体格で、口の周りからあごとこめかみまで髭を生やし、ワイルドな雰囲気醸し出している。Tシャツに短パンというラフな格好が多く、陽気で話し好きな典型的なアメリカ人、といった感じだ。クラスの母親たちともすぐに打ち解けて、保護者の飲み会を企画し、PTA活動や学級の保護者ボランティアにも熱心だった。一〇月のハロウインの週、かぼちゃをくりぬく学級ボランティアで一緒になった時も、教室に筋肉ムキムキのアメコミヒーロー「キャプテン・アメリカ」の衣装で登場し、子どもたちの人気を集めていた。対するボブは、ロマンスグレーの短髪にスラリとした長身で、いつもシンプルながら品のある服を着こなしている。下がり気味の瞳と整った鼻筋は、俳優のジョージ・クルーニーを彷彿とさせる。クリスより口数は少なく、落ち着いた柔らかな物腰の「優しいお父さん」タイプだ。

ニューヨーク市には多種多様な人種・民族が住み、ゲイ、レズビアン、バイセクシャルの人口も推定計二七万人と全米の都市で最も多い。米国の中でも、子どもがいる同性カップルが暮らしやすい街であることは間違いない。それでも、学齢期の子を育てるゲイカップルとなると、まだ珍しい存在だ。

長男が通う小学校では、八〇〇人を超える全校生徒の七割近くを白人が占める。PTA幹部によると、一人親家庭や養親家庭もあるが、圧倒的多数は父と母がいる家庭。カミングアウトしているレズビアンカップルの親は三組、ゲイカップルは一組だけだという。

子どもたちの送り迎えはクリスだけがしていたので、父親二人の家庭であることを、あえて周囲に明かさないといい選択もできたに違いない。だが彼らは、クラスの授業参観や保護者面談などに必ず夫夫で現れた。身長一八〇センチを超えた男性二人が、校内で肩を並べて歩く姿はかなり人目を引いたが、クリスとボブは堂々としていて、ゲイカップルだということを隠そうとするふうはない。学校にも地域にも自然と溶け込んでいるように見えた。いや、息子たちのために必死に溶け込もうとしていた、と言った方が正確かもしれない。

二〇一五年六月に同性婚が全米で認められる判決が出たものの、キリスト教右派など保守派勢力が力を持つ米国では、同性愛者を嫌悪し、「結婚は男女のもの」、「子どもには父と母が必要だ」と考える人々が少なからずいる。ニューヨークの土地柄とクリスの社交的な性格も手伝って、保護者の中で、表立って彼らを批判するような人はいない。だが、ふとした瞬間に、「特殊な家庭」という偏見が垣間見えることもあった。一〇月下旬の冷たい風が吹く日、長男のクラスが校外学習で人形劇を見に行った時のこと。付き添いボランティアで同行したところ、チャーター一人が半そでと半ズボンで来ていた。それを見るなり、ある母親が顔をしかめて言った。

「何て寒そうなの！ ちゃんと季節に合った服装をさせないとかわいそうだって、先生が親に言うべきだわ」。言外に「母親がいないから、子どもの服装に季節感がない」という偏見が見え隠れする。